

「メキシコ チャパラだより」 338号

東京、銀座「文藝春秋画廊」での展覧会は、四月五日から十日までで、これは無事終えることができた。今回は家内の書、水彩画を並べて二人展、二人三脚となった。ともに七十歳を過ぎててもメキシコに住み、作品集も作ってこれを記念してのことでもある。若い若いと思っけていても年令には勝てない。いつどこで何が起こるかしれずこれも覚悟の上だ。

\*-----\*

出品作の大作二点は会場で枠を組んでもらいそこへはった。横三メートル縦二メートル余の作は運搬も不可能でありにも大きすぎる。作品の裏打ちもしてもらった。この大作、自ら呼んで「めちゃくちゃ画」とにかく作品仕上げるのに現場で八日間かかった。描いているあいだ、自分でももう何を描いているのか、さっぱりわからなくなってしまったほどだ。会場で初めてパネルにおさまったのを見た。見ると、残した墨の余白の白が点々と光っている。これは裏打ちをしない前はわからなかったことだ。さらに遠く離れてみると、一層絵がはっきりしてきた。近くで見ると点描に近い、墨痕だけなのだと思う。みごと作品がよみがえってきた。墨のもつ摩訶不思議さ、その魅力でもある。

作品を飾りおえて、会期中の一週間は作品をならべ、あと作品を見てくださる方を待つばかりでこれといって仕事はない。作者にとってはまことに気分のよいもので至福の時間といってよいだろう。じっくりと自作と対峙できる時でもありこの折り反省もできる。それに対してわずか一週間足らずの短期間の展覧会なのに、その準備にずい分時間をとられてしまう。また、お金もかかる。個展案内状の作成、発送、作品を入れる額縁などの購入、展覧会々場への搬入、報道関係への通知、その他あまたありで、ほとほと疲れてしまう。個人展を開いたことの経験のある人ならきっとこのたいへんさはわかってもらえる筈だ。日本、メキシコでこの何十年間、個展開いて同じことくりかえしてきたが、わたしは諸団体やグループに属さずに作品発表してきて、これはよかったと今でもそう思う。これからもきっとそうだろう。これに限る。

\*-----\*

このあと、京都文化博物館での「墨で描くメキシコ展」とつづく。会場は奥行き四十メートル幅十四メートルで、四つの壁面で区切られるから四室あると思えばよい。また、会期中の五月二十日(木)夕方から、京都外国語大学内で、「墨で描くメキシコ」と題し、講演もする。

本誌掲載写真は  
今回展覧会を訪れた俳優の金田龍之介氏と筆者  
島田和子書 会場風景

島田正治 「墨で描くメキシコ」  
会期 2004年5月18日(火)～23日(日)  
午前10時～午後6時(入場は午後五時半まで)  
会場 京都文化博物館5階全室

・・・次号につづく